

ネパールにおける地域歯科保健開発と村人の健康観の変容

中村 修一¹⁾, 深井 穂博²⁾, 安部 一紀³⁾, 奥野ひろみ⁴⁾
西野 宇信⁵⁾, アミット・カナル⁶⁾, 白田千代子⁷⁾

Development of dental health and change
in health behavior of rural Nepalese community

Nakamura S¹⁾, Fukai K²⁾, Abe K³⁾, Okuno H⁴⁾, Nishino T⁵⁾, Khanal A⁶⁾, Hakuta C⁷⁾

¹⁾九州歯科大学国際協力室, ²⁾深井保健科学研究所, ³⁾西南女学院大学保健福祉学部
⁴⁾信州大学医学部保健学科広域看護学講座地域看護, ⁵⁾九州歯科大学口腔治療学講座齲蝕歯髄疾患制御学分野
⁶⁾九州歯科大学口腔顎顔面外科学講座病態制御学分野, ⁷⁾東京医科歯科大学歯学部口腔保健学科

キーワード：健康観、欲求度の変遷、都市化

はじめに

ネパールでの地域歯科保健開発活動は21年が経過し、自立型の活動として進展しつつある^{1), 2)}。この間、活動現場であるネパール国ラリトプール郡テチョー村、ダパケル村は首都カトマンズの近郊の村として、都市化の影響を受け、村人の生活も大きく変容した³⁾。特にこの5～6年の変化は著しい。演者らは活動の初期より村人を対象に健康観の調査を実施している。今回は「今欲しい物は何」との質問に関する調査の結果について報告する。

調査方法

健康観調査は1993年と2003年と2008年に実施した。調査はいずれも、テチョー村HPセンター歯科外来診療所に来院したネワール族、チェトリ族、ブラマン族を主とする村人を対象とした。

1993年の調査対象者を部族別に表1に示す。対象者は89名で「今欲しい物は何か」との質問について自由回答を求め回答分析を行った。

2003年の調査はHPセンター外来歯科診療所に受診に来た村人332人を対象に調査を行った(表2)。「今欲しい物は何か」について、質問項目に

表1 1993年健康観調査「今欲しいもの」

今欲しいもの	ネパール	
	人数	(%)
仕事	12	16.7
学問 教育	7	9.7
お金	6	8.3
健康(薬、治療など)	17	23.6
良い食べ物	4	5.6
休息	2	2.8
特に欲しい物はない	24	33.3
合計	72	100.0

表2 2003年調査「今何が欲しいですか?」対象332人

	とても欲しい	欲しい	どちらでもない	いらない	全くいらない	未記入
仕事	38	78	5	9	105	97
%	11.4	23.5	1.5	2.7	31.6	29.2
教育	32	85	3	10	199	2
%	9.9	25.6	0.9	3.0	59.9	0.6
お金	49	157	4	8	111	3
%	14.8	47.3	1.2	2.4	33.4	0.9
健康	13	107	2	5	198	7
%	3.9	32.2	0.6	1.5	59.6	2.1
食べ物	4	172	12	11	129	4
%	1.2	51.8	3.6	3.3	38.9	1.2
住まい	32	156	13	11	110	10
%	9.6	47.0	3.9	3.3	33.1	3.0

【著者連絡先】

〒810-0041 福岡県福岡市中央区大名1-11-5-902

中村修一

TEL&FAX : 092-761-3671

表3 2008年調査「今何が欲しいですか？」対象206人

	とても欲しい	欲しい	どちらでもない	いない	全くいない	未記入
仕事	124	57	10	5	3	7
%	60.2	27.7	4.9	2.4	1.5	3.4
教育	115	57	20	5	1	8
%	55.8	27.7	9.7	2.4	0.5	3.9
お金	143	40	12	3	1	7
%	69.4	19.4	5.8	1.5	0.5	3.4
健康	100	50	40	2	2	12
%	48.5	24.3	19.4	1.0	1.0	5.8
食べ物	147	37	15	1	1	5
%	71.4	18.0	7.3	0.5	0.5	2.4
住まい	80	84	1	1	1	39
%	38.8	40.8	0.5	0.5	0.5	18.9

①仕事、②教育、③お金、④薬や清潔な水や診療などの健康、⑤安全な食べ物、⑥住まいを挙げ、とても欲しい、欲しい、どちらでも良い、いない、全くいない、の5段階評価から回答を求めた。

2008年に同様の調査をHPセンター外来歯科診療所で村人206人を対象に実施した(表3)。

結果と考察

1. 1993年の調査

ネパールでの活動初期に実施した89人の健康観調査について有効回答を得た72名の調査結果を表4に示す。最も多かったのは「特に欲しい物はない」で24人33.3%であった。つぎは薬や適切な治療など「健康」に関する欲求で17人23.6%であった。以下「仕事」16.7%、「学問・教育」9.7%、「お金」8.3%、「良い食べ物」5.6%、「休息」2.8%と続いた。この関係を図1にグラフとして示す。当時のテチョー村は都市化の影響も無く、普通の農村で豊かとは言えない状況にあり。「欲しい物」の上位に「特に欲しい物はない」があがるとは予想していなかった。貧しくても心豊かな生活を営んでいるが「健康」に対する欲求が二位にあることは、医療に対するニーズが高いことが分かった。

今欲しいもの(%)

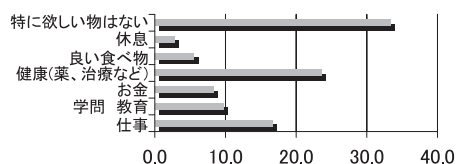


図1 1993年調査「今欲しいもの」

2. 2003年および2008年の調査

最初の健康観調査から10年が経過した2003年テチョー村の生活環境も変化したので再び村人の健康観に関しアンケート調査を実施した。その5年後の2008年に同様の調査を行った。その結果を表5(2003年)と表6(2008年)に示す。

2003年の調査はテチョー村ヘルスプロモーションセンター外来診療室に歯科受診に訪れた村人332人を対象に実施した。仕事、教育、お金、健康、食べ物、住まいの6項目の質問に対する欲求度5項目の回答結果を表5に示すが、最高欲求度の「とても欲しい」が1位を示す回答は無く、逆に最下位の「全くいない」が1位を占めたのは、仕事31.6%、教育59.9%、健康59.6%であった。一方欲求度が2番目の「欲しい」が1位を占めたのはお金47.3%、食べ物51.8%、住まい47.0%であった。この結果、6項目の欲求度は欲しいグループと欲しくないグループの双峰性を示すことがわかった。個別にみると「とても欲しい」の回答で最も多かったのは食べ物71.4%で次にお金69.4%、仕事69.2%、教育55.8%、健康(安全な水や薬や治療など)48.5%、住まい38.8%と続いた。

2003年の調査後ネパールは政治や経済が大きく変容しテチョー村も都市化の影響を受けた。そこで、5年後の2008年に2003年と同じ調査をテチョー村ヘルスプロモーションセンター外来診療室に歯科受診に訪れた村人206人を対象に実施した。調査結果を表6に示す。仕事、教育、お金、健康、食べ物、5項目の質問に対する回答が最高位の「とても欲しい」であった。二番目の回答も「欲しい」であった。住まいに対する回答は「欲しい」が40.8%、「とても欲しい」38.8%であった。これに対し「いない」、「全くいない」に対する回答は質問の全項目で0.5%~2.5%であった。この結果、6項目の欲求度は「とても欲しい」をピークとする単独峰性の特徴を持つことがわかった。

3. 欲求度の変遷

「今欲しいのもの」に関する2003年および2008

年の調査結果の俯瞰図を図2および図3に示す。2003年調査結果は「欲しい」と「欲しくない」グループが「どちらでもない」を境に二分され双峰性を示していることが明確である(図2)。5年後の2008年の調査結果を見ると「欲しくない」グループはほぼ全部「欲しい」グループに移行し単独峰性を示すことが顕著である。これを仮に「欲求の左方移動」と呼ぶことにする。

そこで、質問6項目の回答を平均し、さらに5段階回答について「とても欲しい」と「欲しい」を平均して新「欲しい」に「いらぬ」と「全くいらぬ」を平均して新「いらぬ」として、2003年と2008年の調査結果を比較した。新「欲しい」群は2003年46.4%であったが2008年83.7%と急増した。これに対し新「いらぬ」群は2003年45.5%であったが、2008年には2.1%とほぼ壊滅状態にあることがわかった。

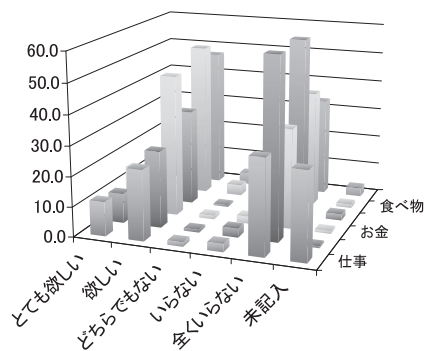


図2 2003年調査「今欲しいもの」

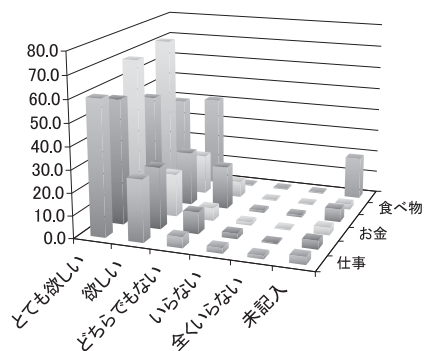


図3 2008年調査「今欲しいもの」

「欲しい」と「とても欲しい」について平均値で比較すると2003年では「欲しい」37.9%で「とても欲しい」8.5%の約4倍あったのに対し、2008年では「欲しい」26.3%で「とても欲しい」57.4%と「とても欲しい」群が急増していることがわかった。

口腔保健を通して21年間テチョー村およびその周辺の村と関わりを持ってきた。発展途上国のネパールではあるが政治・経済・社会情勢は確実に変遷を続けている。今回は健康観調査の一つとして欲求度調査について報告した。ここ5年急速な都市化の流れのなかで村人の欲求の構造が変容していることがわかった。このことは否定できない事実である。健康問題と取り組む立場からこの流れのなかでいかに活かしていくかが問われている⁴⁾。今後ヘルスプロモーション展開因子の連関課題としたい⁵⁾。賢者のご指導を仰ぎたい。

まとめ

1) 欲求の変化は1993年から2003年までは著しい変化は認められなかった。2) 欲求の構造は過去5年間で急速に変容「欲求の左方移動」現象が現れていることがわかった。3) 今後ヘルスプロモーション展開因子の連関として考えたい。

文献

- 1) 中村修一：途上国における歯科保健医療協力について。歯科時報, 653: 1~10, 2009.
- 2) 中村修一編著：国際歯科保健医療学。医歯薬出版株式会社, 東京, 2003.
- 3) 安部一紀, 中村修一, 小川孝雄, 深井穂博, 仙波伊知郎：ネパール王国テチョー村の食生態の変化－過去13年間の食生態調査から－。西南女短大紀要, (49): 63-69, 2003.
- 4) 奥野ひろみ, 中村修一, 小山 修, 深井穂博, 安部一紀：開発途上国での地域把握－ネパール王国での試みから－。西南女学院大学研究紀要, (49): 71-77, 2003.
- 5) 中村修一：国際歯科保健医療開発における「場」の活用。ヘルスサイエンス・ヘルスケア, 7 (2): 2007.

Development of dental health and change in health behavior of rural Nepalese community

Nakamura S¹⁾, Fukai K²⁾, Abe K³⁾, Okuno H⁴⁾, Nishino T¹⁾, Khanal A¹⁾, and Hakuta C⁵⁾

¹⁾ Office of International Dental Health, Kyushyu Dental College

²⁾ Fukai Institute of Health Science

³⁾ Department of Nutritional Science, Seinan Jogakuin University

⁴⁾ Department of Health Science Faculty of Medicine Shinshu University

⁵⁾ School of Oral Health Care Science, Tokyo Medical and Dental University

Key Words : community health development, dental health, Nepal

Association of Dental Cooperation in Nepal is an NGO working in villages of Lalitpur district of rural Nepal since 1989. In the last 21 years, 14,539 patients received dental treatment including teeth extractions, dental fillings, scaling, teeth brushing instructions and plaque control. Similarly, a large population of 93,686 patients got health care in oral health, public health, mother and child health, nutrition and hygiene accounting a total number of 108,224. Altogether, a total of 663 members from Japan participated in the missions where female participants were 261(39.4%). Since the start of school oral health education program in 2003, 250 teachers received training and now they are able to continue fluoride mouth rinsing programs by themselves.

In the last 21 years, the rural villages have seen a lot of socio-economic changes affecting health status due to urbanization process. In a questionnaire survey conducted in 1993 regarding their basic needs, majority of the villagers responded that they had no needs to be fulfilled (33.3%), 23.6% wished for receiving medicine and treatment while remaining minority wished for study, jobs, money, food, etc. In subsequent survey conducted 10 years later in 2003, villager' s population with "no needs" decreased further. Another survey 5 years later in 2008 showed a more drastic decrease in villager' s population that wished "no needs" while a tremendous increase in a group that wished for medicine and treatment, money, jobs, study, foods, etc. In conclusion, modern urbanization and development has shown to be a strong changing role not only in socio-economic enlistment, but also in health behavior patterns.

Health Science and Health Care 9 (2) : 65 – 68, 2009